ガタガタン・・・

ギラム達の襲撃を受けた、惑星パルム内にあるとある機械生産工場。
誰も居ないその場には、行動をするマシナリーが居ない中、物音が工場内で響いていた。

ウィーーン・・・

その後、何かの機械が起動する小さな起動音がした。
起動音の元は、ギラム達の襲撃を受けなかった工場内の一室。
その部屋の扉には『廃品置き場』と書いてあった。

【・・・再演算、停止・・・　これより、固定活動内容プランに移行・・・】

一室にあった一体のマシナリーから機械音に近い音声が流れ、マシナリーを繋いでいた配線に繋がれていた周囲の機械が音を立て始めた。
そして、繋がれた先にあるマシナリーに電力が供給され始め、メカの閉じた瞳から起動を示すかのような光が灯った。

【・・活動プラン再確認。】
「主に・・・最善を・・・」

起動したマシナリーはそう呟くと、瞳をゆっくりと開け前へと足を踏み出した。
すると繋がれていた配線は動くマシナリーの後に付いていけず、次々と配線が接続部分から外れて行った。
繋がれた配線が無くなり、動き出したマシナリーは足取りが軽くなった事を確認し、部屋を出て行った。
そのマシナリーの姿は、赤龍型のマシナリーだった・・・

「俺の主・・・　何処・・・」

マシナリーはそう呟きつつ、記憶回路に先ほど送り込んだ工場内の監視カメラの映像を確認しつ

つ歩いていた。
その映像には工場に入りこみ、フィルスター達を助け出そうとしているギラム、アリン、メアンの姿が映っていた。
彼らの行く手を阻もうとする別のパートナーマシナリー達。　それに手持ち武器で対抗するギラム達。
映像を見ていると、マシナリーはとあるワンシーンで動画を止めた。
そこに映し出されていたのは、ギラムの姿。

「主・・・　今、行くよ・・・！」

マシナリーはそう呟くと、虚ろだった目を一気に見開き、工場の外へと飛び出して行った。

一方その頃・・・

「よし。　これで終了だな。」
「おう。」

タイミングが丁度良いのか悪いのかはさておき、ギラムとフィルスターは同惑星内でＧＲＭ社の依頼を終えた所だった。
今回の依頼内容は、先日襲撃したマシナリー工場のパーツの配達だ。
工場を襲撃した事件は、実はギラム達が帰ったその数時間後に現場をマスコミによって発見され、情報が流れていたのだ。
ニュース等で公開されていた情報にはギラム達の名前は無かったものの、その事件に絡んでいるためか２人は進んで参加したそうだ。

「ご苦労様です。　リトルウィングの社員殿。」

ギラム達が運んだ荷物の確認を終え、ＧＲＭ社の社員は謝礼を述べ、依頼領収書と報酬の書かれた領収書を手渡した。
それを受け取り一通りの作業が終わった事を確認すると、ギラムは軽く手を上げ返事を返した。

「ああ、ご苦労さん。　フィル、帰るぞ。」
「了解ー」

依頼完了に必要な書類を受け取り、ギラムはフィルスターに声をかけた。
その後２人は近くに停泊したマイシップへと向かい、クラッド６へと帰って行った。

惑星パルムから飛び出し、依頼を終えたギラム達はリトルウィング支社のあるクラッド６へと戻ってきた。
ギラムは依頼完了の報告をしにクラウチの元へと向かう中、フィルスターは先に主人であるギラムのマイルームへと向かっていた。
住居区内の通路を１人歩き自室前へと到着すると、ロックを解除するコードを入力し部屋へと入った。

「ふぁああ～・・・　疲れた・・・」

自室へ戻ったのとほぼ同時に、彼は大きなあくびをした。
キャストでは不要なシステムなのだろうが、より生き物に近い動作を見せている。
最近彼の中で出来上がった行動の１つの様で、よりキャストらしくなった彼の日常風景なのであった。
その後大きく開けた口を元に戻し、彼は戻ってくる主人のためにとコーヒーを準備し出した。

ウィーンッ

「フィル、戻ったぜー」

フィルスターが自室へ戻り数分後、依頼報告に向かっていた主人が帰って来た。
その声を聞いた彼は丁度淹れたてのコーヒーをサイドテーブルに置き、ギラムの元へ向かって行った。

「主。　・・・それ」

入口に立っていたギラムの姿を見たフィルスターは、主人が持っていた物を見つつ呟いた。
両手に抱えられていたのはフィルスターと同じナンバータイプの、赤いドラゴン型マシナリーだった。
フィルスターにそっくりなボディデザインではあるものの、頭の上に着けられた角のデザインの

みが違い、カラーリングも正反対の色合いだった。

「あぁ、全部下ろしたはずだったんだが・・・　マイシップに残ってたんだ。」

相方に問われギラムはそう言いつつ、持っていたマシナリーを普段使用しているベットの上へ丁寧に寝かせた。
背後にセットされたシールドラインの翼もフィルスターと同じであり、破損個所が無いようにと彼は各部位をチェックしていた。

「でもどうするんだ主。　もう領収書は貰ったし、報告済ませたんだろ？」
「まぁな。」

報告を終え依頼を完了した事を知っていたフィルスターは、主人が持ってきたマシナリーをどうするのかと質問した。
普通であれば『依頼先の品を持ってきた』と言う事になり、報告ミスとなって訴えられてしまう事も少なくない。
だがそんな事はあまり気にしていない様子で、彼はベットサイドに置かれているコードを静かに引き抜いた。
それは普段フィルスターが使用している充電用コードであり、翼の間にあるパーツを開けると差し込む場所が存在する。
取り出したコードを赤龍マシナリーに差し込むと、充電を示す軽い音と共にシールドラインが淡く発光した。

「あ、主っ！　何してんだ！」
「何って、充電。」

主人の行った行為を見て、フィルスターは急に怒りだした。
普段使用している私物を勝手に使われた事に対する癇癪らしく、彼の背中にしがみ付き抗議していた。

「まだ動くかどうか解らないからな。　このパートナーマシナリーの確認くらいは、取っておく必要があるだろ？　フィルと同じコードでよかったみたいだな。」
「だからって！！」

パチッ・・・

「？」

軽く一方的な言い争いが行われる中、不意に２人の耳に物音が聞こえた。
音のした方角を見ると、そこには赤龍マシナリーがおり目を開けた状態で横になっていた。
それを見たギラムは動く事が確認出来た事を軽く喜んでおり、軽い笑顔を見せながら相手の顔を見た。

「あ、まだ動くみたいだな。　大丈夫か？」
「・・・」

目を開け身体を起こした赤龍マシナリーを見つつ、ギラムは目線を合わせつつ質問した。
ギラムの行動の様子は赤龍マシナリーの瞳にしっかり写っおり、最初は機械的な目を向けていたが次第に表情が変わって行くのを２人は見た。
そして、

「見つけた・・・！！　俺の主！！」

赤龍マシナリーはそう叫ぶと、充電コードが繋がれたまま目の前に居るギラムに抱きついた。
ダイブする様に彼の胸へと飛び込み、彼は嬉しそうに笑顔を見せていた。

「主！？」

しかしそんな赤龍マシナリーの言った言葉を聴き、２人は驚き声を上げていた。
最近の２人は意思疎通が上手く、ハモる事が増えてきたような気もしなくはない。
が、今はあえて説明は入れないでおこう。

「主！！　どういう事だ！！」

フィルスターは相手の言った言葉に再び癇癪を起こし、ギラムに噛み付くように問い正しだした。
肩に捕まっていた腕の力は次第に強くなり、まるで怪獣の様に口を開け威嚇している。
可愛らしい彼にしては珍しい光景である。

「俺が知るか。　確か俺には、フィルスターしかいないはずだが・・・」

今にも噛み付きそうなフィルスターをよそに、ギラムは自分の体にくっ付いたマシナリーを見ようと目線を降ろした。
彼にのしかかる様にくっ付く赤龍は、今でも嬉しそうにギラムの体の感触を確かめていた。

「・・・えっと、とりあえずだ。」

しばらく赤龍マシナリーの好きにさせていると、ギラムは話を開始しようと彼を一時ベットへと戻し真正面から向き合う体制となった。
ベットへと戻された赤龍は不思議そうな目を彼に向けており、何を話し出すのだろうかと気体の眼差しを向けていた。

「お前の事、聞いてもいいか？」
「あ、ゴメンなさい。　自分の事を言うのを忘れてました。」

期待の眼差しを向けていた相手にそう言われ、赤龍マシナリーは面目無さそうにそう言った。
フィルスターと同じくらいの精神年齢に思える物言いであり、ウィンドベルよりもしっかりしていそうな印象が見えていた。
ラスベリーよりも真面目そうであり、これまたフィルスターとは正反対だ。

「自分の名前は『リニログーン』　ギラム・ギクワの直属のパートナーマシナリーだ。」
「え？　俺？」

「ちょっと待て！！」

リニログーンと名乗るマシナリーの言った言葉を聴き、フィルスターは口を挟み抗議し出した。
彼の発言を聞いた相手は静かに首を動かし、フィルスターの事を見た。

「主は俺のだ！　勝手な事言うんじゃねぇ！！」
「パートナーたる者が、主のそばを離れるなんてありえない事。　お前は失格だ。」
「なんだって！？」

自分の言った事を否定する様に発言したフィルスターを見て、リニログーンは先ほどまでの主人に向けていた眼差しとはうってかわり、とても冷酷そうな目を向けていた。

敵対する格下の相手に見せる様な目であり、見ていてとてもイラッとさせる眼つきだった。

「ちょっと待て、落ち着け２人共。」

目の前で２体のマシナリーの言い合いを止めるべく、ギラムは口を挟んだ。
話をしているうちに距離の近くなる２人を引き離そうと両手で身体を押しやり、一度彼等の熱を取ろうと彼は言った。

「説明してくれ。　何で俺のパートナーマシナリーだって解るんだ？」
「俺が決めたんだ。　主はギラムだって。」
「何だ妄想か。」

「違う！」

彼からの問いかけに対し、リニログーンはそう答えた。
あまり明確な説明にはなっておらずとても身勝手な言い分だが、マシナリーなのだから何処かに理由があるのではないかと思われる言い方だった。
だがフィルスターがそれで納得することなく呟いた言葉を聴き、今度はリニログーンが講義し出した。

「彼にとって、俺が最善のパートナーだ！　前戦で戦わないマシナリーが何がパートナーだ！」
「俺は主の援護を主に行動しているだけだ！　後方支援も立派な仕事だ！」

再び互いの距離が近くなり、正面からの真っ向戦闘になりそうな空気が漂い出した。
放置してしまえば今にも武器を取り出し一発初めてしまいそうな雰囲気も出ていた。

「だが、彼には不釣合いだ。　彼は前戦には関心が無い。」
「何！」
「だから落ち着けって、お前ら。」

再び火花が飛び交う中、これまた同じようにギラムは静止した。
互いの身体が再び主人の掌で押し返されると、２人は落ち着く様に間合いを取った。

「リニログーンだったな。　とにかくだ、俺にはフィルスターがいる。　パートナーマシナリーは普通、配属されるんじゃねぇのか？」
「・・・お、俺も配属されたんだ！」

「嘘付くな！」
「嘘じゃない！　俺はここで働くんだ！」

問いかけに対しリニログーンはそう答えると、懲りずにフィルスターは言い争いをし出した。
とても話し合いで解決しそうな雰囲気がしない事を悟り、ギラムは呆れながら額に手を乗せ考えてしまう始末。
マシナリーとは思えないほどの、立派な自己概念を持った機体達であった。

「このままじゃラチが開かない。　ＧＨ５０１フィルスター、俺と主を賭けて勝負だ！！」

そんな悩み苦しむ主人を見て、リニログーンはそう言いつつギラムに抱きつき宣戦布告を言い渡した。
再び主人を取られたと思いフィルスターは激怒し、頭から湯気を出しつつ言った。

「な！　何で主を賭けて戦わなきゃならねぇんだ！！」

リニログーンの言った言葉に対して、フィルスターは当然のように反論した。
元々配属されているのであればそれ以上の戦いは怒らない筈なのに対し、どうしても彼を譲るつもりのない新参者には彼も怒っているのだろう。
手の焼かされる弟が出来たような、兄の様な言い方であった。

「パートナーマシナリーは主を守る、的確な行動をするのが最善行為だ。　それが出来ないって言うんだな？」
「クッ・・・」
「だったら、ギラムは俺の主って事で良いよな。」

とはいえそれで引く様なリニログーンでもなく、ギラムにしがみ付いていた彼はそう言いつつ顔に手を触れた。
それを見たギラムは再び困った表情を見せながら、彼のされるがままに顔を動かされていた。

「おいおい・・・」
「主、俺に最善の仕事をさせてく」

「させるかぁああーーー！！」

ゲシッ！

「あぅっ！」

そんな彼の言おうとした言葉を中断させるべく、フィルスターはその場を駆け出し彼にドロップキックをお見舞いした。
放った蹴り技が見事に顔面に命中すると、リニログーンは吹き飛ばされそのままベットへと激突した。
ぶつかった拍子に棚に乗っていた小物と本が幾つか転倒し、軽く頭を押さえながらリニログーンは起き上がった。

「やったろうじゃねぇか・・・　俺が主であるギラムを手放すと思ってんのか！！」

蹴り飛ばしたリニログーンを睨みつつ、フィルスターは決闘への決意をあらわにした。
いつの間にか目の色は赤く染まっており、相当怒っているのが良く分かる状態であった。
一時的に出ていた湯気は今は落ち着いており、蹴り飛ばした相手を真っ向から睨みつけていた。

「フィル。」
「クッ・・・　やるな。」

ベットに激突したリニログーンは蹴られた部分を撫でつつ、こちらも同様にフィルスターを睨んだ。
宣戦布告をしたのは彼であったものの、見事に顔面に蹴りを入れられるとは思ってもみなかったのだろう。
充電コードを背後に下げながら前へと歩きだし、ベットを降り彼と真正面からにらみ合った。

「それでこそ俺が見込んだ価値があるな・・・　負けた方は、機能を永久停止。　そのまま廃工場行きだぜ。」
「上等だ、正規活動品をなめんなよ！」

フィルスターはリニログーンの言った決闘を受け入れ、互いに戦う意思をあらわにするのであった。

『なんでこう、俺の周りでは奪い合いがたえねぇんだろうな・・・』

そんなこんなで決闘となり目の前で火花を散らす２体のマシナリーを見て、ギラムはため息をついた。
知らぬ間に自分に抱かれていた『主人愛』は彼等にとって一番の重要概念である事を悟り、なおかつ首を突っ込んでも制止を何度かした時から彼は無駄だと悟るのであった。
呆れつつ２体のにらみ合いを見て、ふとギラムはある事に違和感を覚えた。

『でも、アイツの言ってた言葉に違和感があるな・・・』

ギラムはリニログーンを見つつ、何を思って言い出したのだろうかと思うのであった。

突如やって来た新しいパートナーマシナリーに宣戦布告をされたフィルスターは、それからと言うもの小さい事でリニログーンと衝突する事が日に日に増えて行った。
大抵１人でこなしてきた事を横取りしようとすると考えているフィルスターに対し、正しい選択肢が別にあると主張するリニログーン。
慮極端な意見に板挟みにされ、主人のギラムも半ばお手上げ状態で彼等の衝突を毎日のように見守っているのであった。

「・・・新しいパートナーマシナリーさん、ですか？」
「あぁ、なんか前回襲撃をかけた工場で意識体が覚醒したらしくてな。　フィルの今の立ち位置をかけて、勝負を申し込んできたんだ。」
「フィルが言ってた『気に食わない奴』って、その個体の事だったんですね。」
「まぁな。」

ある日の昼下がり、ギラムは２人が外出している隙を見てアリンとウィンドベルと共にカフェで事情を説明していた。
その日の２人は『どちらが主人にふさわしい料理を提供できるか』と言う事柄で衝突し、２人で睨み合いながらショッピングモールエリアへと出かけて行ったのだ。
出費は半ば自分ではあるものの、その辺はギラムは気にしていない様子で２人が出かけるのを見送ったそうだ。

「で、だ。　俺はあんまりパートナーマシナリーの制度を良く知らないんだが、普通は主人に１人だろ？　配属されるのは。」
「はい、私もそのように認知しております。　特例で『他の大型マシナリー』をパートナーマシナリーと共に配属する事はある様ですが、それは介護などの大きな作業をするため。　普通の傭兵の方々は、皆１人につき１体の様です。」
「初心者研修は僕達には必要ないので、データを元に常にプランニングをする形で動いています。　なので、今回の様な衝突は基本的に起こらない筈なんですが・・・」

アリンと共に話をしていたギラムは、パートナーマシナリーの配属制度について詳しく聞くために２人を招いていた。
呼び出した要件を軽く質問すると、２人は丁寧に答え特例以外ではマシナリーが２体配属される事は無いと説明した。
比較的小さなパートナーマシナリー１体では行えない事をするために、別のマシナリーを用意

する。
１体ではサポートをするには大変な相手を、２体で補助し行動する。
などと言った特例が前提であり、ギラムの様に『現役の稼ぎ頭』にそんな特例が認められるはずがない。
平和的解決は難しい事を理解すると、彼は納得し別の策を考える事にした様だ。
すると、

「ギラムッ！　買って来たぞ！！」
「ギラムっ！　ランチをお持ちしました！」

「基本的に・・・起こらない、はずです。」
「・・・　現に今、俺の周りで起こってるからな。」

３人の居た元に慌ただしくも２体の龍型マシナリー達が乱入し、それぞれが手にしたランチセットを主人の元へと運んできた。
威勢が良く他の傭兵達もその声につられて騒動の起こる場へと視線が集まり、ギラムは呆れつつもベルに返事を返し２体が差し出した袋を１つずつ受け取った。
フィルスターが持ってきたのは紫色の紙袋であり、リニログーンが持ってきたのは紙地に近い布の巾着袋。
すでに中身が違う事が目に見えており、とりあえず２体に礼を良い静かにするよう言った後２人に中身を問いかけた。

「今日は何を買ってきたんだ。」
「俺は、ある・・・　ギラムが前に食べたいって行ってた『ハッシュドビーフ』と『オムライス』がセットになってた奴だ。　まだ温かいから、温かいうちに食べてくれよな。」
「俺はギラムが『野菜料理』が好きだと伺ったので、『山菜天ぷら』と『茶そば』をセットにして用意しました。　大根おろしも付いてるので、特性の汁に着けて食べて下さい。」
「はいはい、ありがとな。」

予想通りの両極端のメニューを聞き、ギラムは軽く礼を言った後テーブルに２つのランチセットを出した。
フィルスターの用意したのは洋食であり、呟き混じりに言った会話を覚えていた事が分かる温かい料理。
対するリニログーンは主人の好みを把握した和食で勝負を挑み、互いの料理を食べるためカロリーも気にした配慮を見せていた。

互いに主人への想いは忘れていない事が良く分かるため、なおのこと彼は溜息をつくしかない。

『何で俺がこんな事にジャッジを下さないといけないんだ・・・』

食べる量は左程気にしていないものの、それに対し毎回判決を下さないと彼等は気が済まない。
そう言ったところが、彼にとって面倒なのだ。

「まぁ、とても美味しそうなビーフシチューですね。　紙袋を見ますと、あのお店の物ではありませんか？」
「おうっ！　ギラムが気に入って足を運んでる『ミドルガーデン』って所のだぜー　味もお墨付きだ。」
「リニログーンさんの山菜天ぷらも、普通の衣で揚げた物じゃないですよね。　それに茶そばなんて、普通のお店じゃ流通してません。」
「ご名答。　俺のは素材とギラムが俺達の料理を毎回食べる事を気にして、カロリーを気にしなおかつ舌を飽きさせない物を選んだんだ。　店の調査も済んでるから、ギラムが気に入ってくれると思う。」

２人の持ってきた料理が目の前に置かれ、アリンとウィンドベルはそれぞれが目にし驚いた点を彼等に質問した。
互いに調達してきた店はどれも名の知れた店であり、フィルスターは主人のお気に入りの店で調達してきた。
対しリニログーンは完全無農薬、なおかつ食材にこだわり手順にまでこだわった老舗の店で調達してきた。
誇らしげに２人が話すと同時に、互いに気に食わなかった点を口論の種として２人は口にする。

「ギラムはカロリーを仕事で消費するから、少し多めに取った方が良いんだよ！！　セーブして自慢の筋肉を痩せさせようって気か！？」
「馬鹿みたいにカロリーを摂取して、血糖値や内臓を壊したらどうするんだ！！　そんな配慮もお前は出来ないのか！？」
「毎回仕事に応じた栄養は俺だって考えてるやいっ！！　お前こそ、舌を飽きさせないとかいって高い物食わせたいだけだろ！　ギラムの金を考えろ！！」
「なんだと！！」

「・・・ま、いつもこんな感じなんだけどな。　お前等！　静かにしろ。」
「うっ・・・」　「うっ・・・」

互いに考えている事は一緒なのに対し、何故か２人とも相手の事を受け入れようとしない。
本当に『マシナリー』なのかと思える順応性の無さにギラムは軽く慣れた様子でアリン達に言った後、口論する２人に怒り静かにするよう言うのだった。
注意されると２人して似たような反応をし静かにする所を見ると、本当に良く似た物同士の様に思える。
３人のやり取りを見たアリンとウィンドベルは軽く苦笑し、ギラムの辛さを少しだけ理解する様に頷くのだった。

「そういえばフィル。　どうして主人の事を急に名前で呼んでるんですか？」

その後食事を開始するギラムを見た後、ウィンドベルは不意に気が付いた点を２人に質問した。
それは先ほどから彼等の主人であるギラムの事を『名前』で呼んでいる点であり、今までのフィルスターを見たら驚く点だ。
問われたフィルスターは軽く腕を組み、軽く不満そうに２人で決めたルールをウィンドベルに説明した。

「決着が付くまで、２人で『主(あるじ)』って呼ばない事をルールに入れたんだ。　言ったら減点。」
「最終決断は１週間後に出してもらう事にして、それまでの間互いが考えた主人への最善を尽くす。　それが、俺達の意識を賭けた争奪合戦だ。」
「そ、そうなんですか・・・」

妙な所で意見が合った事を知り、ウィンドベルは生返事をし２人の様子を軽く見守った。
その後主人が２人の用意した食事を食べ終えると、３人は仲良くその場を後にし部屋へと戻って行ったのだった。

カフェでのやり取りを終え自室へと戻って来たギラムは、すぐさま隣を歩いていた２体のパートナーマシナリーが主人の後に続いて入るのを見た後、それぞれの出迎えを受けていた。
互いが行っている小さくも将来を決める戦いの火蓋は何処でも切れる様子で、珈琲を準備するフィルスターと体調を気遣うリニログーン。
何も口論が無ければとても平和なのだが、どうしても衝突があるためギラムは言う時は言うが言わない時は言わない事に決めた様だった。

「コーヒー出来たぜ、ギラム。」
「あぁ、ありがとさんフィル。」
「ギラム、今日は身体の調子が良さそうですね。　肩もあまり張ってません。」
「依頼は明日の予定だったから、あんまり疲れてないのかもな。　リニロもありがとな。」

とはいえ、お礼はちゃんと言うのがギラムのスタイル。
主人の前で口論し周りに迷惑をかけるのに対し、何故かこういう時には礼を言うというお人よし。
とても強面な傭兵が言う言葉とは思えないものの、３人はそんな事は気にしない。
その後３人はギラムを間に並んでベットに腰かけ、フィルスターの用意した珈琲を口にし一服した。
静かにまったりしている時は、ギラムも安心してリラックス出来る様だった。

「そういや今日は、フィルが俺の部屋で寝るんだったな。　リニロはどうするんだ。」
「先日は別の場で迷惑をかけたので、今日はもう少しギラムの手間をかけない場所にします。
まだ未定ですが、決まり次第ご連絡を入れます。」
「そっか、了解。」

そんなまったりした雰囲気の中、ギラムは不意に今夜の事を気にし出した。
フィルスターとリニログーンの間で決めた約束事は『主人の呼び方』だけではなく、その日の夜に『主人のそばに居るのは１体だけ』という決まり事もあった。
後者の決まりはギラムが申し出た事によって決まった事であり、２体が一緒に居ては自分が寝られない事からその制度が出来た。
不在中の居場所は彼等が独自で決める事にしており、リニログーンには不利だが主人の迷惑にならない場所にしよう、と言う事になっていた。
そのため、この制度でリニログーンはすでに減点となっている、らしい。

『らしい』という曖昧な表現なのは、ギラムが点数制度で採点していないから、と言う意味だ。
彼は点数では無く感覚で決めているため、実際名前呼びをされても主(あるじ)と呼ばれても彼は気にしていないのだった。
なので、事実上彼等の中でのみ減点されている事になる。

「ギラムに迷惑かけて、ゴミ処理場に行かない様にするんだな。」
「当り前さ。　君こそ、気の緩みで大幅に減点されない様にしないとな。　さっきから言いかけてばかりだぞ。」
「っせぇーな。　お前には関係ないだろー」
「はいはい、落ち着こうなお前等。」

その後互いに茶々を入れあい挑発し合った後、ギラムは宥める様にそう言いカップを片づけた。
彼の行動を見た２人も同様にカップを片づけ、洗う作業をフィルスターが行う事となった。

「とりあえず夕飯にはまだ早いから、俺は少し施設に行って身体を動かしてくるぜ。　その間、お前等は部屋の掃除でもしておてくれ。　フィルはカーテンからベットサイド側。　リニロは反対のブースな。」
「了解です、ギラム。」

洗い物を任せたついでと、ギラムは２人に部屋の掃除をするよう命令した。
部屋が二分割され比較的広い部屋を使っている彼は、フィルスターに掃除を任せ出かける事もしばしばある。
その日は２体居る事もあり、彼等に別々の場を掃除する様指示したのだった。
丁度カーテンで二分割出来る事もあり、リビング側と寝室側でフィルスターとリニログーンは対決する事となった。
しかし、

「了解主ー」
「ハイ減点。」
「ぁっ・・・　き、気を付けてなギラムっ！」
「はいはい。」

洗い物をしつつ返事をした事もあってか、フィルスターはついついいつもの呼び方で主人を呼んでしまった。
彼の減点をリニログーンは見逃すことなく指摘をし、ギラムは苦笑しながら２人を置いて外へと

出て行った。

「・・・ったく。　リニロ、お前はそっちなんだからなー　範囲が広いとか、文句言うんじゃねぇぞ。」
「文句どころか、デメリットを克服し優位に立つには好条件。　君こそ、手元で発言がおろそかになるくらいだ。　ミスをするなよ？」
「うっせぇえー！！」

残された２体はそんなやり取りをしながらも、任されたテリトリーを即座に清掃しにかかった。
用意された道具を互いに交代で使いながら言い合いをするも、彼等は任された仕事を全うするのであった。

「ん、んーっ・・・　そろそろ頃合いか。」

その後しばらくし、施設でトレーニングを行っていたギラムは時計を見つつ服を着替えていた。
本日は明日の依頼に備え過度な鍛錬は行わず、体力維持の為の行動のみを行っていた。
ＶＲ空間で用意された場を使い道路を走り壁を昇り、その後プールで熱くなった身体を冷やしつつ前提で浴びる事となっているシャワーで汗を流す。
事前に用意していたトレーニングウェアと水着を履き替え洗濯し、合間に行動すると言うとても効率のいい行動を行っていた。
基本的に持久力を落とさないための行動であり、ロッククライミングは腕力の強化、と言ったところだろう。
種族もあってか、とても様になっている。
その後改めてシャワーを浴びベンチで休憩し、今に至る。

『フィルとリニロ、ちゃんと掃除してっかな・・・　道具を共有にしちまったからか、なーんか心配なんだよな。』

施設へ来る際に羽織っていた上着を着ながら、彼は不意に彼等が仕事をしているか不安になっていた。
フィルスター１人であれば何の心配も無く仕事を任せ留守も預けられるが、今回ばかりは口論す

る相手であり仕事を取り合う仲となるライバルがいる。
主人の前でも大声で口論する所を何度も見せられると、やはり心配なのだろう。

『・・・まぁでも、アイツ等の事だし仕事が終わってからの口論だろ。　明日の依頼で、リニロが何を得意とするのかも見ておくか。』

とはいえ、深くは考えず気楽にしていようと彼は考えそれ以上は気にしない事にした様だ。
元々あれやこれやと考える事が不得意ではないものの、対人関係に対してはギラムは基本的に頓着はしない。
アリンの様に訳ありであったり、メアンの様に問題行動が多々見える相手に対しては配慮するが、必要性が無い相手に対しては彼は基本的にしないのだ。
フィルスターもそのうちの１人であり、彼の性格や仕事能力の高さは評価しており、他については気にしていない。
主人を弄る所に対しては厄介だとは考えているが、彼に自制は求めていないのだ。
軽く考えながら身支度を済ませると、彼は持ってきた荷物一式を自室へと送りその場を後にしようとした。
しかし、そんな彼の足を止める物が不意に彼の視界に映った。

「・・・ん。　・・・たまには、何か土産でも買って行ってやるか。」

彼の目に入ったのは、施設の出口付近によく置かれているありふれた自動販売機だった。
中には飲み物から小さな食べ物まで入っており、お金を入れればそれが出てくる仕組みだ。
ギラムは画面に出てくる商品リストを一通り見た後、適当な物を購入しその場を後にして行った。

「フィル、リニロ。　帰ったぜー」

施設を後にし自室へと帰宅すると、ギラムは扉の前で一声かけドアロックを解除した。
パスコードを認証し持ち主である事が確認されると、ドアからロックを外す音が聞こえ自動で扉が開いた。

ウィーンッ・・・

「・・・おぉっ」

閉められた扉が開き中へと入ると、ギラムは目の前に飛び込んできた光景に言葉を失った。
目の前に広がっていたのは見慣れた自室ではあったものの、何処か空気が違いとても清潔感溢れる空間へと変貌していた。
入口から最初に入るのはリニログーンが任されていたリビングで、置かれていたガラステーブルはピカピカに輝き部屋の照明で光り輝くほどに反射していた。
他に置かれている観葉植物やグッツの一式も綺麗に手入れが行われており、台座の上にあるオブジェも全て磨き込まれていた。
とても雑巾一枚で行ったとは思えない程に、見事な仕上がりが広がっていた。

「リビングって、こんなに綺麗だったか・・・？　・・・ベットはどうなってんだ。」

リビングに軽く驚きながら感想を漏らした後、彼はベットルームへと移動し閉められていたカーテンを開けた。
すると、カーテンの奥から爽やかな石鹸の香りが彼を包み込み、部屋全体を包んだ香りがリビングへと漏れ出した。
鼻孔を擽る良い香りを感じた後に広がるのは、これまた見慣れたベッドルームではあるものの清潔感の違う空間だった
普段使用しているベットのシーツ一式は全て交感され、真新しい綺麗な布地が彼の目に映った。
使用している枕も同様に別物に代わっており、以前までブラウンで統一されていた物が全てスカイブルーの物へと変化していた。
ベットサイドに置かれていたコーヒーメーカーも脂すら残さない程に綺麗に洗われ、帰ってくる頃を見計らってなのか、珈琲も出来上がっていた。
ビジフォン周辺も全て乾拭きしており、指紋すら残さない徹底ぶりであった。
ある意味『フィルスターの本気』と言えそうな仕上がりであった。

「スゲェな・・・　・・・？」

そんな両部屋の変貌ぶりに驚かされた彼は荷物を置こうとベットサイドへ近づき、何かを見つけた様子でその場に立ち止まった。
彼の目の先にはビジフォンが備わったカウンターの隣にある棚であり、棚の前には疲れて眠っているフィルスターとリニログーンの姿があった。
２体は互いに肩を預けながら静かに眠っており、互いの翼が邪魔にならない様しっかりずれていた。

先ほどまで仲の悪かった彼等とは思えない程、仲が良さそうであった。

『疲れる程、ちゃんと仕事をしたんだな。　お疲れさん、フィル。　リニロ。』

そんな２人の様子を見て軽く微笑んだ後、ギラムは近くに畳まれていたタオルケットを広げ彼等の足元に静かにかけた。
その後軽く２体の頭を撫でた後、用意してあった珈琲を飲もうとベットへと向かい一息付くのであった。

「んじゃ、そーいう事で。　今日はお前が外だかんなっ　くれぐれも、ギラムに迷惑になる過ごし方をしねーよーに。」
『フィルの奴、心底嬉しそうだな・・・』

掃除を任せ席を外したギラムが帰宅し、２体が起きたのはそれからしばらくした後の事。
夕方の手土産を３人で食べた後、フィルスターは堂々とリニログーンに一晩外で過ごすよう命じた。
正確には『外の施設で一泊』であるため、野宿では無い。
心底嬉しそうな雰囲気丸出しの彼であるためか、かえって清々しい。

「あぁ、解っている。　ギラム、明日の依頼時にまた逢いましょう。　今日はこれで失礼します。」
「了解、ちゃんと休める所で休むんだぞ。」
「はい。」

半ば意地悪な先輩の言う事に返答を返しつつ、リニログーンはギラムに声をかけた後頭を下げた。
とても礼儀正しいマシナリーの行動を見て感心しつつギラムも挨拶をすると、彼は笑顔を見せ部屋を後にして行った。
泊まる場が見つかった際に折り返し連絡をすると言う事で、彼等に後々連絡が来る事となっているため、主人は左程気にしていない様だった。

「・・・ふぅ。　フィル、とりあえず明日の支度を済ませて早めに寝るぞ。　明日は依頼だからな。」
「了解、主ー」
「・・・今は、主(あるじ)なんだな。　フィル。」

仮同居人であったリニログーンが離席したのを見届けると、ギラムは軽く両手を伸ばしストレッチをしなが
らフィルスターに指示を出した。
指示を聞いた彼は主人に返答すると、従来の呼び方に戻っており軽くいつも通りである事をギラムは悟った。
何故戻したのかと聞くと、彼は不思議そうな顔を見せた後理由を話し出した。

「だって、主は俺に名前で呼ばれるの好きじゃねーだろ？　リニロが言うから仕方なくそうして

るけど、決着以前に指摘しないアイツが居ない今は、いつも通り主って呼ぶぜ。　俺は。」
「そっか。　じゃ、夜はそう言う事にしておくか。」
「おうっ」

理由を話され納得した様子で、ギラムは彼らしい理由を聞いてまんざらでもない様子だった。
元々彼もパートナーとして配属されたフィルスター以外のパートナーを望んだ事は無く、いろいろな苦難の中共に過ごしてきた仲間に変わりはない。
アリン達とのパーティを結成しようと言い出した際も、そんな彼が主人と周りの場を築くために用意した物なのだろうとギラムは考えていた。

人付き合い以前に回りに好まれる事は少なく、戦闘面でしか彼は評価を受ける事がない。
対人関係は特に苦手であり、フリーの傭兵の時から周りとのコミュニケーションはろくに取る事は無かった。
むしろ「とれなかった」と言っても間違いではない程、交友的な仲間は居なかったのだ。
だからこそ、エミリア達の様にちょっとした切欠で話せる仲間が出来た時と、そうでない時をフィルスターは違いを感じていた。
自分にも仲良くしてくれるアリン達と一緒に居たい。
主人の対人関係を良くして、もっと楽しそうに過ごせる様にして上げたい。
素直に自身の考えを述べる事のないフィルスターではあったものの、ギラムは何となくだが考えている事が読める様だった。
現に今も、主人の目の前で相方は武器の手入れを楽しく行っている。
依頼の際中のやる気のない発言とは裏腹に、主人と居る時間はとても楽しそうだ。

「そういや。　フィルと武器の手入れをするのは、なんだかんだで習慣になってるな。　お前と依頼に行く事が増えたのも１つの理由だが、お前も何だかんだで俺の援護をしてくれる。　助かってるぜ。」

リニログーンが掃除をした場に置かれているテーブルの元に使う武器を置き、２人は武器の手入れを行う。
仲良く２人は別々の椅子に座りながら手だけを動かしており、口だけは別の事を喋っている状態に等しい。
だが互いに細部の手入れは確実に行っており、今まで行ってきた事だからこそ基礎から大切にしている様だった。
そんな中ギラムは、フィルスターに他愛もない雑談を振っていた。

「俺は別に、依頼で主に怪我とかされた嫌だし。　主とパーティを組んだりする他の傭兵達を見てても、あんまり主の事を良く想ってくれてそうな奴って少ねぇし？　だったら俺が一緒に居て、主の気を紛らわせてやったり主の行動のサポートをした方が気が楽だし。　まぁ・・・なんだっていいじゃん。」
「まぁそうなんだけどな。　でも、ちゃんとお前にも礼を言ってやらないとなって思う事が少なからずあってさ。　お前は俺と一緒に行動をしてくれた数少ない仲間であり、俺との同居人だ。　言える時に言わないと、ナヴァルに叱られそうで怖いんだよな。」

主人に振られた話題に相槌を返しつつフィルスターはそう言い、ライフルの銃口にゴミが詰まっていないかを確認していた。
パートナーマシナリーが依頼に同行する事は珍しいわけでは無いが、基本的に他の傭兵達共にパーティを組んで依頼をする事が一般的だ。
ゆえにギラムも対人関係が苦手であっても、仕事では他の種族が違う人間達とのコミュニケーションは必然的に行っていた。
だがフィルスターはあまり好んでいないらしく、苦手意識の強い彼の面々を総合的に観察した結果が今の同行に繋がっていることを話した。

主人の人格そのものを好まない相手と仕事をしても楽しくなければ、その人達ともう一度仕事をしても楽しくないかもしれない。
過去の周囲の蔑視が強かった事で主人が止まりかけた事もあるからこそ、フィルスターはとても心配していたのだろう。
とても言う事と表情が釣り合っていないため、彼の返答を聞きギラムは苦笑するしかなかった。
ここまでツンデレっぷりが発揮されていると、かえってギラムも嬉しい様だ。
素直に喜んでくれればそれで良いのに、なぜか彼は好きな主人に素を見せる事が少ない。
そこもまた、彼の過去と何らかの理由があるのかもしれない。
そう思いながらギラムは冗談交じりに一言いうと、フィルスターは驚きながら手を止め主人を見ながらこう言った。

「ぇーっ、さすがに亡霊が説教しには来ねぇだろ・・・　引くわ、主。」
「なんでそうなるんだよ。」
「冗談だってっ　怒るなよ主ーっ」
「駄ー目だ。　俺もたまには怒るぜ、フィル。　飯抜きにしてやろうか？」
「わーそれだけはっ！　主大臣様っ、どうか御慈悲をぉおーーーっ」

互いに冗談を交えながら小さな口論を行い、フィルスターは悪い事を言ったとばかりに両手を合わせ怒りを鎮めて欲しいと志願した。
しかし簡単に許すほどギラムも単純な思考回路では無く、弄られた分は弄り返すとばかりにフィ

ルスターに冗談を言いからかうのだった。

「何が大臣だよ、馬鹿かお前は。」
「いててっ　痛いって主ぃっ」
「ハハハッ」

一通りからかい終えると、ギラムは決まってフィルスターの頭を軽く叩きながら乱暴に頭を撫でる。
そして互い笑顔で笑い合い、２人で楽しそうな時間を過ごすのだった。

今まで互いにその場で過ごし、互いの事を考えて行動し続けてきた。
だからこそ新しいパートナーが現れても、ギラムはフィルスター以外を望む事も無かった。
新たにやって来たこの騒動も、かえって彼のありがたみを感じるにはいい機会なのかもしれない。

『フィルもリニロも、なんだかんだで俺にやる事は一緒だからな。』

性格の違う２人の良い所と悪い所を見る良い機会に恵まれたと思いながら、ギラムは再び手を動かすのだった。
すると、

ピピピッ、ピピピッ！

「ん？　リニロか？」
「ぇっ？」

笑い声に包まれていた空間に電子音が聞こえ、相手からの通信が入った事を知らせた。
音を聞きギラムは機械を操作し通信画面を開くと、そこにはリニログーンの姿が映っていた。

『ギラム、今日の宿泊先が決まったのでご連絡を入れました。　フィルスターが何か粗相をしてませんか？』
「だぁーれが粗相だ馬鹿野郎っ　俺の主の心配をするんだったら、お前の居場所が消える事の心配をしやがれってんだっ」

笑顔で約束の連絡を入れ報告をすると、リニログーンはフィルスターが何か粗相をしていないかと心配していた。
その声を聞いたフィルスターはカメラ部分に映り込みながら口論を開始し、心配する様な事は起こっていないと報告をした。
しかし、

『また主って言いましたね、フィル。　マイナスです。』
「ゲッ！」

どうやらそれも彼の策略だった様子で、再び主人の呼び方を指摘され軽く減点対象である事を言わされてしまうのであった。
後悔先に立たずとは、こういう時に言えるのかもしれない。
感情の高まり程、ミスは多い。

『ではギラム、先に休ませてもらいます。　良い休息をお取りください。』
「あぁ、お休みリニロ。　また明日な。」
『はい。』

ピッ

一通り弄って満足したのか、リニログーンは再び挨拶をして回線を切った。
カメラに回り込んだフィルスターは少し離れた位置に移動しており、先ほどの口論の割には落ち着いているとギラムは思った。

「・・・っだぁあああああーーー！！　可愛くねえ可愛くねえ可愛くねえ可愛くねえ！！！
　んだアンニャロォオ！！　先輩にマイナスさせるためだけに連絡入れたのかぁああ！！！！」
「落ち着けってフィル。　近所迷惑だぞ。」
「落ち着いていられるか！！　この勝負、ぜってぇええ勝つ！！！　アイツをプレスして木端微塵にしねえと気が済まねえ！！」
「やれやれ。」

だが実際にはそんな事は無く、感情向き出しで彼は激怒していた。
よほど自分を弄る相手が気に食わないのか、主人に弄られた時とは全く逆の態度を取っていた。

それほどライバル視しているとも言えるのだろうが、ここまで来るとかえって嫌なのだろう。
廃品工場に彼を送ったくらいでは、彼の苛立ちは収まらないかもしれない。

そんな相方に呆れながらもギラムは苦笑し、彼を再度なだめ床に就くのだった。

フィルスターの機嫌が中々治らない中、睡眠を取り依頼へと向かって行ったギラム達一行。
その日はフィルスターとリニログーンの同行に加え、同時に同じ場所での依頼を受けたアリンとウィンドベル、メアンとラスベリーも同じ船で一緒に向かっていた。
今回の目的地は惑星ニューデイズにある『ミズラキ保護区』であり、両チームとも指定された物資の調達となっていた。

「じゃあ皆、素材集めだからそんなに時間はかからないと思うが、指定した時間に集まれそうになかったら連絡をくれ。　対処出来ない現生生物に出会った時も、同様にな。」

マイシップから現場へと降りたギラムは７人で集まって移動し、事前に決めた集合地点へと向かった。
紅葉の綺麗な保護区内にその日は特別に許可を得て入った事もあってか、周りには見慣れた傭兵達の姿も無くとても静かな環境だった。
天候も良く、絶好の紅葉狩り日和である。

「はい、わかりました。」
「りょっかいギラム～」

それぞれが目的とする依頼は別物であるため、ココから先はギラム達とアリン達は別々の行動を取る事となる。
ギラム達は周辺地域に離されたと思われる『モグ・ボッゴ』の素体回収を行い、本体を転送する事。
アリン達は現場周辺で活動するマシナリーの行動パターンをチェックし、異常があった際はデータを書き換える作業を任されていた。
比較的危険性の高い方をギラムは自ら引き受け、フィルスターとリニログーンの３人で行こうと考えていたのだった。

「俺達もベル達も、探す個体数は解ってるからそんなに苦戦する事はねーだろ。　一応指定された時間に戻ってこれるように、互いに頑張ろうぜー」
「了解ですフィル。　アリンさん、頑張りましょうっ」
「えぇ、そうねベルちゃん。　それではギラムさん、また後ほど。」
「あぁ、気を付けてな。」

それぞれが行う依頼の個体数を再確認し終えた後、アリンは静かにお辞儀をした後メアン達と共

に西へと向かって歩き出した。
ウィンドベルが彼女のそばを歩き、先頭をメアンとラスベリーが歩き敵がいないかを確認するというフォーメーションで動いていた。
戦闘タイプも踏まえた、理想的な行動体系である。

「・・・うし。　それじゃ、俺達も行くか。　企業から依頼された個体は全部で４体、見つけ次第マークを付けてポイントへ誘い込もうか。」
「了解です、ギラム。」
「了解ギラムー」

そんな４人の後姿を見送ると、ギラムは後ろへと振り返り待機していたフィルスターとリニログーンに声をかけた。
２人共扱いなれた武器を手にしており、フィルスターはライフルを持ち、リニログーンはナックルを装着していた。
武器だけで戦闘タイプが違うのが目に見えており、ギラムの現戦闘タイプである『ブレイバー』で足りない部分を補うと言う形だ。
そのため、主な行動はフィルスターよりも前であり、リニログーンよりも後ろの行動となるだろう。

「さぁリニロ、お手並み拝見と行こうじゃねぇか。　そのナックルが、ただのお飾りじゃねぇって所見せて見ろよな。」

とはいえ平和な道中になりそうにない雰囲気は常に張られており、早速と言わんばかりにフィルスターはリニログーンに宣戦布告を申し出た。
両者共にその日使用する武器は把握済みであり、互いに別々の行いが出来るスタンスが組まれていた。
そのため、どちらが接近をしても遠距離をしても、自分とは違うためある意味バッシングはし放題である。

「それはこっちの台詞ですフィル。　貴方の持つ長銃も、ただのおまけでない行動をしてみてください。　ギラムの戦闘タイプ上、自分の方が有利です。」
「そーれはどうかな～？　主は遠近両方の行動が取れるナイスガイだ。　接近馬鹿でギラムの手間を取らせんなよ。」
「また『主』って言いましたね。　フィル。」
「ぇっ・・・！」

口論はしばらく続きながら道中を移動していると、不意にリニログーンはフィルスターの発言に指摘を入れた。
普段から呼び慣れている言い方を変えると言うのはここまで難しいと思えるほどであり、キャストの思考回路にしてはちょっとしたミスが目立つ。
主人を呼ぶ際の言い方が後からの変更と言う事もあってか、ある意味人間の様なうっかりミスである。
慌てたフィルスターは言ったとは思えない様子で主人に聞くと、

「ぁっ、ギラム俺言ったか！？」
「・・・まぁ。」
「減点です。　ではギラム、予定していたルートを自分が先行しますので気を楽に移動してください。」
「あぁ。　了解。」

主人はしっかり聞いていた事もあり、リニログーンの中での彼のポイントがさらに下落した事を悟る事となった。
とはいえ、張り合う相手と主人への言葉づかいの違う彼はとても優秀であり、先行をするが後から続いてくれとは言わなかった。
辺りを警戒しなければならない前衛を自ら率先して行い、危険性が少ない事を事前に主人に知らせる。
これもまた、パートナーマシナリーの役目であろう。
彼の細かな配慮を感じつつ、ギラムは歩を進め機嫌の悪そうなフィルスターを後ろに移動し出した。

「ったく、アイツ無駄に耳良過ぎだろ・・・　ちょっとくらい良いじゃんっ、俺の主なんだから。」

背中越しにフィルスターは愚痴を零しながら進み、とても不機嫌そうに歩いていた。
それでも背後の警戒は怠らない様子でライフルを時々構えている所を見ると、瞬時に切り替えられるが愚痴くらいは零したいという状況なのかもしれない。
２体のパートナーマシナリーが自分の事を守ってくれている事を知りながら、ギラムは軽く彼の話に耳を傾けていた。

「まぁお前等の言い出した論戦であって、俺は別に気にしてないんだけどな。　主なら主で良いし、名前なら名前でな。」

「？　ある・・・ギラムは、名前の方が良かったりするのか・・・？」

愚痴を聞きそれに対する返事を返すと、フィルスターは驚きながら質問を返した。
昨晩彼が言った通りギラムは『自分を名前で呼ぶ事』はあまり好きではないとフィルスターは認識していた。
それは元々名前で呼ばれる事が好くなかった事もだが、嫌味と付け加えられる名前が合致する事が彼の中で不愉快でしかなかったからだ。
無論彼の元に所属された時からフィルスターはその事を知っており、主人へ対する呼び方をあえて自己流に変えているだけだ。
そのため、主人が名前で呼ばれる事全部が嫌いではない事を聞いた今は、とても驚いていたのだった

「同士のアリン達だったら、全然な。　親がせっかく俺に付けてくれた名前なんだから、それで呼ばれないのは俺じゃないみたいだろ？　フィル達みたいに上下関係があるなら、全然『主』で構わないんだけどな。」
「・・・じゃあ、アリン達に名前で呼ばれるの。　ギラムは嬉しいんだな。」
「あぁ。　愛称で呼んでくれる仲間って言うのは、それだけ俺との間に距離を感じていないって証拠だからな。　嬉しいぜ。」

質問に対しギラムはそう答え、名前で呼んでくれる仲間が居る今がとても幸せである事を彼に告げた。
今まで依頼を頻繁に一緒する仲間が居なかった事もだが、エミリアの様にしょっちゅう一緒する事もなかった。
ゆえに彼女や上司の様にフレンドリーに名前を呼んでくれることは、満更でもないのだ。
フィルスターの勘違いでは無く、周りが変わったからこそ得られたものがあった。
それが、先ほど言った名前に対する考え方の違いなのだった。

「これからもっと、増えると良いな。　主の友達。」
「ありがとさん、フィル。　さっ、今日の依頼も頑張ろうぜ。」
「おうっ」

そんな軽い雑談をしていると、前方を歩いていたリニログーンが手を振り合図を送っていた。
すでに小さな原生生物の駆除を終えた様子で、安全である事を２人に言っていた。
声を聞いたギラム達がその場に向かい合流すると、リニログーンは功績を盾にフィルスターに喧嘩を売りつつ道中を進んで行くのだった。

「ぉっ、居た。　ある・・・ギラム。　こっちに一匹、目標の奴を見つけたぜー」

道中を共にしていた３人は目標地点へと到着し、それぞれがターゲットを誘導するべく行動していた。
先に主人であるギラムに連絡をしたのはフィルスターであり、口調に気を使いながらも報告した。
通信機越しに背後の風景を映すと、ギラムは納得し送られてきた座標を地図と照らし合わせていた。

「了解フィル。　リニロ、そっちはどうだ？」

データを組み替えながら彼は返事をし、別の場所にいるリニログーンに声をかけた。
彼もまたフィルスター同様に別行動をとっていたが、こちらはすでに別の準備を整えていたのか、座標に加えこれから通るルートの詳細データも送られていた。

【はい、こちらはお送りしたルートを使って、そちらに戻ります。　丁度今、誘導するための仕掛けを整えた所です。】
「あいよ。　・・・となると、残りはこの場に居る奴等だけ。　だな。」

二体のパートナーマシナリーからの報告を受け終えると、ギラムは通信以外の機能を閉じ、視界に捕らえたターゲットを見た。
彼の立っている場所から数十メートル離れた場所は、先ほどまで彼が通ってきた獣道とは違い、広く開いた空き地となっている。
その場所に目標がうろついており、相手はまだ彼の姿と気配を捉えていない。
自分自身よりも大きく、なおかつ二体の目標をこれから彼は相手にしようとしていたのだった。

【無茶すんなよ、主っ　俺も誘導したらすぐ戻るからな！】
「あぁ、頼むぜフィル。」
【減点です、フィル。】
【うっせ！！　いいから仕事しろ！！】

そんな彼の勇姿溢れる立ち姿を見て、フィルスターは一刻も早く合流し彼の援護をしたくてたまらない口振りだった。
とはいえ、感情的になると普段の呼び名になってしまう様子で、再びリニログーンに突っ込みを入れられてしまうのだった。

そんな二人の主人想いであり、微笑ましくも血の気溢れるやり取りを耳にしながら、彼は通信を切り手元に使い慣れたツインダガーを手にした。

ピピピッ

その後彼はわざと大きい音量で電子音を響かせ、 相手がこちらに向いたのを見て、気合いを入れるように一息ついた。

「・・・よしっ。　・・・おいっ！　こっちだっ！！」

《！！　ギャォオオーー！！》

その後相手に向けて叫びながら、彼は地面を蹴り前へと向かって飛び出した。

「はっ！　・・・っと。　隙が多過ぎるぜッ！」

大型の敵を二体相手にする中、ギラムは果敢にも近接武器で二体の体力を削っていた、
気配を感じ取らせない位置にいた彼だったが、軽快な足取りで相手との間合いを詰め、鋭い爪に気を付けながらダメージを与える。
時折武器の刃に秘められた力によって、相手を痺れさせ、有利に戦いを進めていた。

ガスンッ！

「うしっ。　・・・！！」

その後気合いを入れた回し蹴りが決まったのを感じ、彼は間合いを保とうと後退しようとした。
その瞬間に彼は何かを感じ、とっさに相手の居ない大地に向かって飛び込んだ。
すると、

ドォオオオーーン！！

彼の居た大地を大きく揺るがす振動と共に、雷鳴の如く地響きが轟いた。
間一髪で敵の強力な一撃を免れた彼は、体制を立て直しながら武器を変えた。

「噂通りの地鳴り攻撃って所か。　良いぜ、燃えてきた！！」
《ギャォオオオーーー！！》

おかれた状況下は不利ではあったものの、今の彼には不安な要素を感じさせるどころか、今回の依頼を楽しんでいる様子。
持っていたダガーをハンドガンへと持ち変え、再び彼は相手に向かって攻撃を開始した。

一方その頃・・・

ピッピピッ

「・・・よーし、これでＯＫー　アリンー、そっちどおー？」
「はい、こちらも修正完了です。　ベルちゃん、残りのマシナリーさん達はどうですか？」

ギラム達とは別行動を取っていたアリンは、自身のパートナーであるウィンドベルと、同行してくれているメアン、そして彼女のパートナーであるラスベリーと共に、周囲を探索しているマシナリーの調整を行っていた。
この場で活動するマシナリー達の調子が時折悪くなり、正常に稼働していないという話を聞いた本社から、直々に頼まれたもの。
本来ならばギラムも同行し皆と終えるつもりだったが、現状が現状のため彼女達に任されていたのだ。

「こちらは問題ありません。　今調整した個体が正常に稼働すれば、僕達の依頼は終了です。」
「あとは、ミスター達が上手い事やってくれればパーフェクトだな。」
「解りました。　・・・」

最後の調整を行っていたウィンドベルは個体の配線を弄りながらそう答え、ボディパーツを閉めた。
その後起動音と思われる音と共にランプが点灯し、しばし同じ反応を相手は見せていた。

すると、

ウィーンウィーンッ・・・

《・・・》

様子を見守っていた彼女達の前でマシナリーは動きだし、活動内容を確認するように再びランプを点灯させた。
その後ゆっくりと歩き出し、彼女達の元から去って行った。

「・・・問題ナッシングー　だよね？　ベリリー」
「あぁ、ナッシングだ。　そしたら、ミー達も引き上げようか。」
「そうですね。」

依頼内容に記載されていた個体数分の調整を終えたのを見て、メアンはラスベリーに確認を取りながら背伸びをした。
問いかけられた彼がそう答えると、互いに挨拶をかけあい、マイシップへと向けて歩き出した。

「それにしても、結構情報が的確だったねー　症状が出ちゃってるマシナリーは本当に出てたし、微量でもちゃーんとチェックした方が良いって言うのも、的確ー」
「ベルちゃん、このデータは確か・・・」
「はい。　以前僕達を支配しようとしていた、あの『シノワビート』さんからのオリジナルデータです。　生体チェック等のプログラムは僕とフィルが行いましたが、こんなに正確な物を貰えるなんて、思ってもみませんでした。」

帰路へと向かう中、不意にメアンは今回世話になったデータベースを話題にした。
使用したデータベース、それは依頼を受け、当日に向けて準備を行っていた時に匿名で彼らのもとへとやってきた代物。
送り主は明記されてはいなかったものの、解析を行ったフィルスターが暗号化されていたコードを解読した結果、誰が送ってきたのかを知ったのだ。
送られてきたデータは、主に『マシナリー達の調子や考えを見抜く』事を目的として作られたものであり、使いやすいように改良したものが、現在彼女達の端末に入っているのだった。

「へぇ～　やっぱりシノワンは優秀だったんだねー　壊さなくて正解ー？」
「マスター　調子が良過ぎるぜ。」
「へへへー」

そんな詫びと償いの意味が込められた代物に感謝しながら、彼女達は楽しげに道中を歩くのだった。

その頃、依頼を託した彼はというと・・・

「はぁあっ！！」

捕獲対象である『モグ・ポッコ』との奮闘を続けており、交互に攻撃しながら体力を削っていた。
しかし相手にした敵も中々の強敵であり、ほぼ全ての攻撃が入るも倒れそうにはない。
一度間合いを取ろうと、ギラムは後方へバックしながら相手の出方をうかがった。

「・・・チッ、やっぱり簡単な蹴り技程度じゃ倒れないか。　無論それくらいじゃないと、転送する時に困るんだけどな。」

《ギャォオオオーー！！》

攻め続ける体制に休息をいれながら、彼は武器を持ち直した。
間合いを取った彼を見て敵が威嚇するなか、対した恐れも抱かずに、彼は変わらぬ瞳の色をしていた。
戦闘タイプ上近距離も遠距離も可能としてはいるが、中々独りで全てを有利にすることはできない。
相方が援護をしてくれるからこそ有利に出来ていることを、彼は改めて感じていた。
その時だ。

「主ー！！　連れて来たぜー！！」
「ギラム！　こちらもです！！」

彼の元に二体のパートナーマシナリーの声が聞こえ、別の鳴き声も同時にやってきた。
声のした方角を見ると、フィルスターとリニログーンが別々の道を通って走ってくる姿が見えた。
頼もしい事に、彼らは連れてくる敵にある程度のダメージを与えていた様子で、新たに増えたモグ・ポッコの身体に傷が残っていた。

「っしゃあっ！　お前等も来い！！」

現状が有利になったことを確認すると、ギラムはそう叫び走り出した。
彼が向かったのは、空き地へ入る際に通った道であり、その先にはすでに捕獲用の罠が設置されており、４体纏めて送る準備が整っていた。
主人の行動を見たフィルスター達も進路を変え、相手にしていなかった敵に対し軽く攻撃を仕掛けた。
それによって敵は二体の後を追うように歩き出し、綺麗に罠へ向けて誘導されていた。
その後仕掛けた罠をフィルスター達が飛び越え、モグ・ポッコ達が入った瞬間を見て、ギラムは端末にアクセスした。

「・・・うしっ、今だ！！」
「了解主！！」「かしこまりました！！」

罠を起動する合図を受け、フィルスターとリニログーンは返事をし、罠を起動させた。
すると、地面に埋め込まれていた電磁壁が展開され、閉じ込められたモグポッコ達を転送する準備が整った。
取り零しが無いことを瞬時に確認すると、ギラムは転送先に指示を送った。

パシュンッ・・・！！

すると即座に転送が行われ、罠と共に彼らの目の前からモグポッコ達が消え去った。
罠を植え込んだ際に開いた穴も綺麗に無くなっており、完全に空間ごと運んだ形となっていた。

「・・・　・・・うしっ、無事に目標個体を送信したぜ。　連絡も来たっと。」
「よし、お疲れさん２人とも。　怪我は平気か？」
「あぁ、ぜーんぜん。　・・・って、主泥だらけじゃないか。　駄目だろ、こんな恰好。」
「？　あぁ、悪い。」

その後ログを辿り送り先へ転送が完了したことを、フィルスターは端末を弄りながら確認した。
報告を受けたギラムは手に付いた土を叩きながら二人に確認をするも、何故かダメ出しを受けてしまっていた。
その理由は今の彼の格好であり、よく見ると戦闘に神経を使っていたためか、服の至るところに

腐葉土になりかけた土が付着していた。
場所によっては紅葉もついており、ある意味ワイルドな格好である。

「夢中になるといっつもそうだよなー　砂漠じゃねえんだから、ちっとは自重しろよー」
「中々手応えがある敵だったからな。　つい本気になっちまったぜ。」
「血が滾るって所は、やっぱり『ビースト』なんだろうな。　主らしいぜ、ハハッ」
「そうかもな。　ハハハハッ」

『・・・』

そんな主人を見て、フィルスターは手で落とせる汚れを丁寧に落としながら、笑顔で『世話のしがいがある』と伝えていた。
ある意味世話好きな一面のあるフィルスターだが、基本彼にしかしない。
そんな中の良いやり取りを見て、リニログーンは口を閉ざしたまま、二人のやり取りを見ていた。

「・・・とりあえず、自分達も戻りましょう。　ギラムの身体も、早く綺麗にした方が見栄えが良いですよ。」

しばらくしてそのやり取りを見ていたリニログーンは、ある提案を主人に持ちかけた。
するとその提案を聞いたギラムは自分の身形を見直して、静かに頷いた。

「そうだな。　先にマイシップ行く前に、どっか湖でも探して軽めに拭いとくか・・・」
「なら、自分が持ってきたタオルを使って下さい。」

提案を受理されたのを受け、リニログーンは何処からともなくタオルを取り出した。
彼が差し出したのは、白地に青のラインが入ったものであり、わざわざこのために持ってきたのか、小分けの袋と共にやってきた。
本来ならば肌着の変えも持ってくることがあるそうだが、正式に認められていないため、自重した様だ。

「おぉ、準備が良いな。　ありがとさん、リニロ。」
「いえ、これくらい当然です。」
『ッ・・・』

そんな新たなパートナー候補、リニログーンからの配慮を受け、こちらも笑顔で渡すのだった。

しかし、それを見て現業のフィルスターが、黙っているはずも無い。

「主っ！　俺も手伝うぞ！！」
「えっ？　手伝うも何も、拭ける範囲しか汚れてないぞ。」

こちらも何処からともなく取り出したタオルで何かを主張しており、真っ向からの勝負を挑んでいた。
余談ではあるが、フィルスターが出したのはバスタオルであり、柄は緑に白地の星模様である。
何を思ってそう言い出したのか解らない主人を差し置いての、押し売りサービスとも言えそうだ。

「良いから！　俺もタオル持ってるっつーの！　汚れて何ぼだろ！？　主は！！」
「なんだよそれ。」

結局何が言いたいのか解らないフィルスターからのタオルも受けとり、ギラムは苦笑しながら近くの湖へと寄り道した。
その後も続く２人のよく解らないやり取りを聞き流しながら、ギラムはアリン達と合流し、帰宅したのだった。

卑屈の褐色

惑星ニューデイズでの依頼を終え、服の汚れをあらかた落とし終えた後。
ギラム達はマイシップでクラッド６へと帰還し、事務所へと赴いていた。

「クラウチ、任されていた仕事と依頼の完了報告に来たぜ。」
「おう、お前らか。 相変わらず仲が良いな、両手に花とは。」
「冷やかしは良いから、書類。 任せたぞ。」
「お前さんも相変わらずだな。 了解、確かに受け取ったぜ。」

上司であるクラウチの元へと向かい、ギラムは依頼を終えた際に貰うデータを提出した。
事務所で彼が行うことは基本的にこれだけであり、後は席に座っている顔見知りの上司達が処理をすることとなっている。
残りの彼等の仕事と言えば、業務日誌や武器の手入れや、雑務くらいである。

「・・・にしても、お前さんも大分成長したな。 エミリアのお守りを任せた時から素質がある気はしてたが、なんだかんだで今じゃパーティの司令塔。 そのうえガーディアンズと顔が効く関係までいくとなると、中々いないぞ。」
「そうか？」

そんな仕事の多いと思われる上司が、入力作業をしながら雑談を持ちかけてきた。
元々ギラムはフリーの傭兵として行動していた時に、レリクスでの仕事で知り合ったリトルウィングに勧誘されて入社した経歴を持っている。
当時はいろいろと他の社員から難癖をつけられる事も多く、クラウチの頼みで雑用をすることの方が多かったが、今の彼を見るとそんな面影は何処にもない。
しいて言えば、弄られるくらいしかない。

「俺は、言うほど対したことをしてるつもりは無かったんだが・・・」
「まぁそんなに謙虚になるな。 顔に合わんからな。」
「さらっと失礼な事言ったな・・・」

とはいえ、そんな上司でも彼にとってみれば父親変わりと言える存在の様子で、互いにやり取りを楽しんでいる一面もあるのだった。
そんなときだ。

ウィーン・・・

「ギラム、お待たせしました。 ベッドメイキングと食事の用意が整いました。」
『ゲッ、来やがった・・・！』

事務所とホールを仕切る扉が開き、彼等の元にリニログーンがやってきた。
一足先に戻った彼は、主人の部屋で布団を整え、食事と珈琲の用意をしていたのだ。
いつの間にか席を外したことを喜んでいたフィルスターにとってみれば、要らぬご報告である。

「では、私達も戻りましょうか。 ベルちゃん。」
「そうですね。 フィル、僕達も戻りましょう。」
「えっ、何で俺も戻・・・ ・・・ゲッ！！ 今日俺の番か！？」

そんな彼の様子を見ながら、アリンはその場に居た皆に部屋に戻ることを告げた。
彼女の言うことに賛同したウィンドベルはフィルスターに帰宅することを告げると、何故か驚かれてしまった。
リニログーンがやってきてから数日間、夜の間は主人が静かに寝るために決めた決まりで、交代で寝る場所を移動していた２体のパートナーマシナリー
今日はその闘いも最後となる、夜でもあった。

「フィルが前々から言ってたことですよ・・・？ では皆さん、僕達はお先に失礼しますね。」
「お疲れさまですギラムさん、メアンさん。」
「あぁ、お疲れさん二人とも。 フィル」

「嫌だぁぁああーーー！！ 主が毒牙にぃぃいいいーーー！！」

半ば強制的に連れていかれる中、フィルスターはよく解らない苦痛の叫びをあげていた。
そんな相方の熱意とバカさ加減を感じつつ、ギラムはフィルスターを見ていた。

「では、自分達も戻りましょうか。 主(あるじ)。」
「あ、あぁ。 じゃあなメアン、ラズベリー お疲れさん。」
「お疲れさまー ギラムー」

その後辺りが静かになったと同時に、彼はリニログーンに手を引かれた。

いつしか見知らぬ間柄から主人と執事の関係になっていた様子で、手を引いたリニログーンは笑顔でギラムを見ていた。
そんな彼に静かに笑みを帰すと、彼等は自室へと帰っていった。

依頼を終え各自解散となった後。
フィルスターはウィンドベルに手を引かれながら、彼の主人であるアリンの部屋へとやってきた。
先日はフィルスターがギラムと共に静かな夜を過ごしていたため、その日はリニログーンが夜を貸しきる日となっている。
そのためか、現在の彼は不機嫌そのものであった。

「・・・チッ。　何で俺が主の部屋以外で寝る羽目になるんだか・・・」

部屋に置かれているソファに腰掛け静かにしていた彼は、不意に独り言の様に愚痴をこぼした。
本来彼の居るべき場所に立ち入れない今日は、彼にとって神経質になる日と言っても過言ではなく、とても落ち着きがない。
ルールがルールのため仕方ないのだが、やはり彼の中で納得がいかない点が多いのだ。

「フィル。　そこまでカリカリしなくても・・・」
「してねぇよカリカリなんて。」

ソファの上で不機嫌な顔をしているフィルスターに対してウィンドベルが言うと、彼はそっけない返事をしていた。
周りがどう見ても落ち着きがなく、あからさまにイライラしているのでウィンドベルもどう扱って良いのか解らない様だ。
手を焼いていると言っても、間違いではないかもしれない。

「とりあえず、落ち着きなよ。」
「落ち着けるかっつうの。　普通配属された主のそばから一晩はなれて、見ず知らずの・・・しかも信頼できねぇ相手に主を任せるんだぜ！？」
「た、確かにそうだけど・・・　うーん・・・」

しかしそんな彼を無視することもウィンドベルには出来ず、再度なだめるように言葉をかけた。
すると今度はフィルスターが抗議と共に同意を求める発言をし、終いには吠え出してしまった。
これには友人であるウィンドベルも驚き、彼の言い分にある正論にどう賛同するべきか考えた。
こうなってくると、半ば心理戦である。

「ギラムさんなら大丈夫ですよ。　フィルちゃん。」

そんな２人の元へ、部屋主であるアリンが奥からやってきた。
丁度定期メンテナンスを終えて髪のセットを整え終えたのか、軽く髪の位置を気にしながらこちらにやってきた。

「何で、そう言えるんだ？」

自信の考えとは違った返答を聞いて、フィルスターは彼女に問いかけた。
正直に言えば、フィルスターは彼女よりもギラムと居る時間が長く、主人の事を熟知している。
彼の好むものも嫌うものも知っており、ましてや社内で起こった騒動の一部始終の非公開部分まで知り尽くしていると言っても、間違いではない。
故に、彼が優しすぎるところも彼は解っているのだ。

自分がどうこう言ったところで助ける事を諦めようとはせず、絶対に出来る範囲を見極め終えるまで、突き進む事もやめないのがギラムだ。
自分がどれだけの苦労をしようと、必ず出来る事から着手し、終わりへと導こうとしている。
今回のケースも異例ではなく、自分が理解できない部分を、フィルスターは誰かから教わりたかったのだ。

「ギラムさんはフィルちゃん以外に、信頼するパートナーはいらっしゃらないと聞きました。
あの赤龍さんも、多分フィルちゃんと似てる所が会ったのだと思いますよ。」
「俺と・・・　似てる所？」
「ベルちゃんにもギラムさんは信頼をお持ちですが、彼とはまた別の事柄がある。　それに今のフィルちゃんがお部屋に居たら、２人きりでお話も出来ませんよ。」

そんなフィルスターの要望をすくい取りながら、アリンは静かに２人のいるソファに腰を下ろした。
自分の出来る事を知ろうとするために話をする場を作り、フィルスターに恨まれようとリニログーンを助ける術を探しだしたい。
恐らく彼が抱いているであろう考えを彼女は伝え、同時にフィルスター以外のパートナーは必要としていない事も伝えた。
その言葉には彼も意外だった様子で、不思議そうな顔をしていた。

「それにあの方は、今は廃棄処分を待つ身と伺っています。　ギラムさんは彼の真意を聞きたくて、そういう風にしたのかもしれません。」

「でもそんなに信用出来るのか？　あの工場には、そんなマシなマシナリーは居なかっただろ？」

リニログーンの現在の状況を知っているアリンがそう言うと、フィルスターはずっと考えていた事を問いかけた。
工場を占拠し革命とまで言っていた一人を除いて、皆操られ自分達を襲ってきた。
そんな事をする側に居た彼を何故助けたいのか、フィルスターに問われたウィンドベルとアリンは考えた。

「確かに、そうでしたね・・・」
「それでもギラムさんは、リニロちゃんを助けたいのかもしれません。　あの時の、ナヴァちゃんみたいにさせないためにも・・・」

フィルスターからの問いかけにウィンドベルとアリンは答えると、少し顔を俯かせつつ言った。
心の中で抱く不安は２人も同じであり、心配をよそに行動を貫こうとうするギラムを信じ、今に至る。
その事を知ったフィルスターは静かにうなずき、こう言った。

「アイツが助ける事を、しないわけが無い、か・・・」

そんな２人の様子を見て、自分だけが不安な気持ちを抱いているのではないことを知り、それ以上言うのをせず、大人しく窓辺から見える星空を見るのだった。

一方その頃、ギラムの部屋ではというと・・・

「エへへ、主と２人っきり。　今日は、俺と一緒に寝てくれるんですよね？」

部屋の奥にあるベットルームでそう良いながら、リニログーンはギラムに寄り添っていた。
帰宅後食事を取り彼がシャワーを浴びている間、リニログーンは今の時間が来ることを密かに心待にしていた。

昼間はずっとフィルスターが彼のそばに居ることが多く、むしろ彼から離れる行動を一切取ろうとしなかったと言っても過言ではなかった。
そのためか、今の彼は素の笑顔を主人に見せていた。
心底嬉しく、無邪気な笑顔だ。

「フィルが居ると口論が耐えないしな。　偶には静かな夜を送ろうぜ。」
「うん！」

問いかけた相手からの返事を聞き、リニログーンは嬉しそうに返事をした。
そんなリニログーンを見て、ギラムは優しく頭を撫で、笑顔を返すのだった。

「・・・何時振りかな。　こうやって主と寝るの・・・」

優しい撫でを受けながらリニログーンはそう呟き、体制を徐々に横に傾けていった。
ベットサイドに腰掛けるギラムの太股に右腕が当たり、そのままうつ伏せになっていく。
完全にリラックスモードになりつつある彼を見て、ギラムは彼の頭を撫で、好きなようにさせながらこう言った。

「お前さん、俺等が請けた依頼でマイシップに居たマシナリーじゃないんだろ。　何処から来たんだ？」
「え・・・」

彼の言った言葉を聞いて、リニログーンは少し驚いた様子で顔を上げた。
今の今まで問われなかった事を唐突に言われた事もだが、彼なりに依頼の最中に紛れ込んだつもりでもあった。
しかし初めから聞かれなかったのではなく、彼は理由を即座に聞かなかったのだ。

訳があって、ここに居ることを。

「・・・知ってたの？」
「依頼を請ける時にコピーしておいた書類に、お前さんのナンバーは無かったからな。　今じゃドラゴンシリーズは流通してるが、リニロの名前はデータとして残っていなかった。」
「そっか・・・　やっぱり、知ってたんだ・・・」

問いかけに対する理由を聞き、リニログーンは寂しそうな顔をしていた。
今までの幸せの時間が終わりを迎えてしまい、状況が一変したのを悟ったかのように。

「話して、くれるな。」
「・・・わかった。」

キツい言動を使わず、心から心配するようにギラムは言うと、リニログーンは頷きながら返事を返した。
その後彼の体から離れ、同じベットの上に並んで腰掛けた。

「今の俺は、主の元で行動していいマシナリーじゃないんだ。　廃棄が決定して、製作工場の大元の演算システムの一部として使われていた。」
「俺等が襲撃した、あの工場のか？」
「ああ。　ギラムとアリン、そしてメアンが襲撃した後。　俺はなぜか、本来の俺の意識で目を覚ました。」

説明と問いかけを同時に答えつつ、リニログーンは自分の今の状況を説明した。
生産工場で彼等が襲撃しなかった部屋で密かに動力源とされ、自らの意識さえも閉ざされた部品と成り下がっていた事。
フィルスターと口論したあの時から、無所属であったこと。
すべてを、彼に話した。

「俺は何時も、主の事を心から考えて行動していた。　・・・でも、俺が最近得た力によって、それが一気に変わっちまったんだ。」
「力？」

寂しそうに隣で喋るリニログーンに対して、ギラムは問いかけた。
問いかけに対し彼は頷き、ギラムを目を見てこういった。

「周りや相手がしていた事を悟る。　簡単に言うと『場の空気を読む力』だ。」
「つまり、リニロは俺や他の奴等と会話をしていて、後からそこに来ても今の状況に察しがつくって事か？」
「ああ。　・・・でも、俺のはそんな生易しいものじゃなくて、行き過ぎた空気読みだったんだ。」

彼の発言を聞いたギラムは、自分が考えた理論と彼の言っている事が正しいかを問いかけた。

問いかけに対し彼はそう答えつつ、少し違うことを告げた。

「場の空気を読みすぎて・・・　俺は知らない間に、今まで担当してきた主達を傷つけてしまったんだ・・・」

自分が誠心誠意尽そうとしていた主に対して、知らぬ間に犯してしまった罪を思い出し、リニログーンは涙を流した。

主人に対して最適な行動、補佐をするために作られたパートナーマシナリー達。
ドラゴンシリーズの１体であるリニログーンは、当時人気を集めていたシリーズであり、個体種は今の所５種類しか無いものの、誰もがその可愛らしい姿に惚れこみ、使用していた。

リニログーンも当時は幸せな生活を送っており、主人と楽しくもあり忙しい毎日を送っていた。
身の回りの世話をし、周囲で話題になっているニュースを得て、報告をする。
充実した毎日と言っても過言ではない、日々だった。

だがリニログーンはそれだけでは満足してはおらず、時々主人へ対するアドバイスが最適なものではないのではないかと、悩んでいた。
質問に対し返答を返した後、期待通りの返事をすることができれば主人は喜び、また自分を頼ってくれると信じていた。
ゆえにその期待に応えられなかった時を知るたびに、何度も何度も考えた。

どうしたらふさわしい回答を確実に返すことが出来るのか。

そんな考えが生まれた後、彼はある力を得ようと決心した。

『最適なアドバイスが出来ないのは、主の心を知らないからだ。　それが解る力を、得よう。』

それが、リニログーンが仕えないと称されてしまった、１つの過ちであり悲しい事件の幕開けだったのだ・・・

それからしばらくの間、いつも通りの生活をしつつ情報を集め、どんな言葉を求めているかを、彼は独学で研究し始めた。
キャストという事もあり頭の回転は速かったためか、どんどん情報を得て記録し、媒体に残し、応用策を立てていった。
その都度パターン分けした返答を返すチャンスが来た際は、彼は迷わず実行し記録し、何がダ

メだったかを研究し続けた。

そしてそんな行動をして数年・・・
本人曰く『場の空気読み』が独自の研究で確定し、実行に移した時。　悲劇は起こった。

彼は当時の主の話を聞き、最適なアドバイスを独自の研究成果で割り出し、発言した。
その時の主人はその発言に驚き、嬉しそうに返答を返していた。
もちろんそれはいいことであり、リニログーンは会得した研究が実践でいかせる事に自身を持ち、どんどん主人に対して最適なアドバイスをしていた。
だが、その幸せな時間は長くは続かなかった・・・

「主ー　今日の依頼の事だが。」

現役バリバリで行動していた当時のリニログーンは、いつも通りの笑顔で主人に言った。
毎回のスケジュール管理はもちろんのこと、主人の体調変化も見逃さず、かつマシナリーとしての職務を全うする。
それこそが、彼の求める仕事スタイルだ。

「ああ。　毎回連絡してくれてありがとう。」

そんか彼の連絡に対し、相手側の主人もいつも通りの笑顔でリニログーンに返事をした。
服装や武器の身支度を済ませ、丁度出ようかと考えていたためか、とても嬉しそうに言っていた。

『今日も主は元気。　発言の波長とかに乱れは無いな。』

そんな主の表情等を見て納得したのか、リニログーンは嬉しそうに心の中で思った。
独自の音声分析ソフトでのチェックも行い、どの点をとっても万全であると彼は自己内で太鼓判を押そうとした。
その時だ。

〔チッ。　毎度毎度出ようとした時に出やがって。　軽く出る時の挨拶だけでいいっつうの。〕
『え・・・？』

ふと頭の中に過った言葉に、リニログーンは少しおどろいた表情をした。

同じ部屋には主人しかおらず、相手の顔を見ていた事もあり、一切口からの音声では無いことは彼は解っていた。
主人の特技に『腹話術』も無い事から、いったい何処から音が入ったのだろうと、軽く混乱していた。

「？　どうかしたのか？」

そんなリニログーンを見てか、主人は少し心配そうに問いかけてきた。
軽く首を傾げながら目線を合わせており、とっさに彼は意識を戻した。

『主が俺の事を心配してくれてる・・・』　「ううん、何でも無い。」

問いかけに対し主人の発言に乱れが出た事を察し、彼は心配させないようにとそう言った。
すると再び、音が掠めた。

〔へェ。　主人に言えない様な報告があるって言うのか。　馬鹿じゃねぇの、コイツ。〕

再びリニログーンの頭の中に、言葉が過ぎった。
今度は紛れもなく音を拾い、声色から誰の声かを知った。
発せられた声色は、今自分の目の前に立っている主人だったのだ。

『な、何だ・・・　俺の頭に、言葉が・・・　・・・！』

何回も頭の中に過った言葉に驚きを隠せず、考えたすえに口を開け、質問をした。

「主。　今、俺の事・・・　馬鹿って言ったか？」
「！！」

音を発した相手が主人ではない事を祈りながら、リニログーンは不安げな目を向け、頭の中を過った言葉を主人へ問いかけた。
問いかけられた主人は驚いた表情を見せ、目を見開き彼を見ていた。

「な、何で・・・　お前。」

先ほどまで心の中で思っていた言葉を告げられ、主人は驚きながら言葉を漏らした。

返答と共にやってきた反応を目の当たりにし、彼は紛れもない真実を知ってしまった。

「じ、じゃあ・・・　毎回主が出ようとした時のこの会話も・・・　いらないって、思ったか？」

信じたくないと心の中で叫びながら、リニログーンはもう１つの言葉も問いかけた。

すると、主人の顔は段々と赤くなり、呼吸が少しずつ乱れだした。
そして、

バシンッ！

「ッ！！」

突如リニログーンの頬を叩き、反動で彼は壁へとぶつかった。
無防備な状態で勢いよく叩かれた事もあり、彼は叩かれた箇所を手で抑えながら主人を見上げた。

「あ、主・・・」
「喋んな！！　お前・・・いつも何時も俺の心の中を・・・　見てたって言うのか！？」

痛みが走る頬に手を当てつつリニログーンは主人を見ると、発言に対して苛立っているのか、叫ぶように問いかけてきた。
無論彼は好意で行っていた事へ対する変化が今現れた事もあり、首を横に振り一生懸命に伝えようとした。

「お、俺はそんなつもりじゃ・・・　ある」

「来んなっ！」
「！」

しかし主人の元へと行こうとしたリニログーンの行動をさえぎるかのように、主人は再び叫んだ。
そして、リニログーンはその場に立ち止まってしまった。

近づく事が許されず、弁解を行おうとしても許されない今、何を行えばいいのか解らなくなっていたのだ。

「お前はそうやっていつもいつも・・・　主のため主のためって言いやがって・・・　本当は主人の心の中を覗いて楽しんでたんだろ！？」
「ち・・・違う・・・」

「本音と実際の発言を聞いて、心の中で笑ってたんだろ！？」
「ちが・・・」

「お前・・・　信頼してたのに・・・　最低なマシナリーだ！！」

「・・・俺・・・」

自分が言おうとしていた言葉さえもさえぎられれ、リニログーンは主人から一番言われたくない言葉を聞いてしまい、ショックを受けた。
そして、その場で涙を流した。
その後その主人からは仕えないと称されてしまい、大元の製作会社にリニログーンは送られてしまったのだった。

それからというもの、何回か別の主人の元を点々と移動し、彼は二度とそんな言葉を言われたくないがために、懸命に仕事をしていた。
だが、自ら会得し行き過ぎた能力となってしまったその力の前に、彼は最善を尽せずにいた。

そして、何度も主人と口論となってしまい、最終的には行動を停止させられてしまい、会社に何度も送られている。

その後書類に何度も同じクレームで返品されてしまい、彼は廃棄処分となってしまい、今まで自由に行動していた思考を全て停止させられてしまい、工場の一部となってしまったのだ。

一連の裏話を聞き、ギラムは驚きながらリニログーンを見た。
思い出として持っていたくない苦い思い出でも、彼が彼自身であることを知れる経緯。
全てが幸せなモノではなかったが、彼にとって主人と過ごすことの出来た時間には変わりはない。
そのため話をする彼の表情は、時々明るくはなるものの、今はとても暗かった。

「リニロ。　今も俺の心の声って言うか・・・　言葉が頭の中に聞こえてるのか？」
「ああ・・・　話を聞いて、少し主の心が揺れているのも、今聞こえてる・・・」

全てを話し終え、偽りを言っても意味が無いと悟ったのか、素直にリニログーンは答えた。
マシナリーとしての自分が最善を求めた結果、主人に避けられてしまう自分になってしまった。
それだけは変えられない事実として
、彼は現状を受け入れるつもりだった。
自分のことを気にかけて過ごしてくれた、ギラムに捨てられるとしても、彼はそれを選んだのだ。

『もう駄目だ・・・　全部話したから、俺の希望も全部絶たれちまったな・・・』

問いかけに対して、ギラムの心の状態に察しが付いたのか、リニログーンは今行っている最大の勝負に負けたと悟っていた。
行き過ぎた読心術を会得したマシナリーと共に過ごしていたら、何時しか人はその力に怯えてしまい、自己防衛として自分を捨てる。
どの主人もそう行動しており、ギラムと同様に話をした主人は皆同じだったためか、リニログーンは絶望を予知した。
統計を重視する、キャストらしい考えだった。

「・・・リニロ。」
『ほらな。　俺が大丈夫と確信したこの人も、俺の事を捨てるに決まってる・・・』

目を閉じギラムの声を聞いたリニログーンは、覚悟を決めたように心の中で呟いた。
何時自分の主電源を切るスイッチを押されても大丈夫なように、心構えをし大人しくしていた。
しかし、

ふわっ

「え・・・？」

意識が消し飛ぶ感覚ではなく、彼の体には人の温もりが接近し、優しく引き寄せられる感触がやってきた。
目を開けてみると、目の前には鍛えあげられた筋肉が浮かぶ服が、目に飛び込んだ。

「辛かっただろ。　何度も電源を落とされて、聞きたくない言葉を毎回聞いて。」
「・・・」

リニログーンが顔を上げると、そこには優しく自分を抱きしめるギラムの髪が見えた。
顔は彼の胸に乗っており、彼の中で動く鼓動が感じ取れる程に密着していた。

「もういいんだぜ。　闇の中に葬られるって、思わなくても。」
「それって・・・　どういう・・・」

優しい鼓動を耳にしながら、リニログーンはまだ飲み込めない状況を知ろうと、ギラムに問いかけた。
すると自分を抱き締めている主人は苦笑しだし、軽く身体が揺れたのを彼は知った。
そして、

「馬鹿だな。　『廃棄にさせない』って意味だぜ。」
「えっ・・・」

今の自分が一番聞きたかった言葉を耳にし、リニログーンは驚きながら言葉を漏らした。
今までの現状が夢の様に変えてくれる言葉を聞かされ、まるで今の光景が幻なのかとも感じさせる、不思議な感覚が彼を包み込む。
なんと返事を返したら良いのだろうかと、リニログーンは久しぶりに思考回路をフル回転していた。
そして、絞り出した言葉を口にした。

「どうして・・・　俺のこの力を知ったら、皆俺の事を捨てたのに・・・」
「お前のそんな過去を知ったら、捨てる訳無いだろ？　その能力を聞いたとしても、俺はどの道

お前を捨てるつもりは無かったしな。」
「・・・」
「お前さんがここへ来た、本当の理由をよく知りたかったから、しばらくココにおいて置いたんだ。」

ギラムからそんな優しい言葉を聞き、リニログーンは開いた状態の口が閉じられなかった。
本当に夢なんじゃないかと何度も考え、そして何度も夢ではない事を知れる温もりを感じた。
何度も何度も同じことを考え、意識を戻され、そしてリニログーンはようやく理解した。

『この人は自分のことを、捨てないで居てくれる』と。

「安心しな。　明日の結果発表で、お前の事を捨てるなんて言わないからさ。　本当の事、話してもらえて嬉しかったぜ。　リニロ。」
「・・・ギラム！」

自分の身の保障が確定し、リニログーンは嬉しさのあまり主の名前を呼び、涙を流しながら服にしがみついた。
もう自分が自分では無くなる瞬間は現れない、ずっと大好きで居られる主人に巡り会えることが出来た。
その嬉しさからか、リニログーンは一生懸命に掴んだ服を引き寄せ、流れる涙を悟らせないように静かに泣き出した。
その様子を見て、ギラムは何も言わずに彼を受け止め、優しく抱きしめながら頭を撫でた。

〔今まで寂しかっただろ。　捨てられてしまった上に、聞きたくない言葉を聞かされ続けて。
俺はお前にそんな能力があっても、見捨てないぜ。〕

「聞こえるよ・・・　主の言葉が・・・　・・・嬉しい。」

抱きしめられ頭を撫でてくれるギラムに対して、リニログーンは頭に中に響く優しい言葉を耳にし、そう言った。

「その言葉は、偽りだったか？」
「ううん・・・　誠心誠意の、本当の言葉だったよ。」
「良かった。」

ギラムからの問いかけにそう答えると、リニログーンは満足するまで彼に抱き付いた。
その動作に反発する事も無く、彼は安心して身体を休めるまで、ずっと抱きしめていたのだった。

集いし向日葵色

普段とは違う夜を迎え、日付が変わった次の日の朝。
朝食と身支度を済ませたギラムの部屋には、いつものメンバーが揃っていた。

「じゃ、発表するぜ。」

自室に集合したパーティメンバー全員の前には、今回の対決者であるフィルスターとリニログーンが居た。
二人は結果発表を聞きたいのか、少々落ち着かない様子で主人の事を見つめている。

「発表前に聞くが。　フィルもリニロも、どんな結果だとしても受け止める覚悟はあるか？」

最終確認としてか、ギラムはフィルスターとリニログーンに問いかけた。
ここで拒むことで別の運命を選択することもでき、彼らの自主性で好きに未来を変えることも出来る。
しかしそれを選べばそれ相応のリスクを背負うことにもなるため、とても重い質問でもあった。

「ああ、あるぜ。　もし俺が選ばれなかったとしても、それが最善じゃなかったって受け止める。　素直に廃棄処分になるぜ。」
「俺も構いません。　すでに捨てられ続けた身、もう覚悟は出来てます。」

主人からの問いかけに対し、２人はそれぞれ回答を述べた。
勝算はどちらに傾いても不思議ではなく、自らの意思でどうなっても構わないと、彼らの決意は揺るぎないものへとなった。
返答を聞きいたギラムは納得するように頷くと、端末を弄りその場に画面を展開し、今回のためにと用意していたフォルダを開けていた。

「ギラムさん。　本当に、廃棄を・・・」

結果発表の重みがその問いかけと返答で察したのか、アリンは少し不安そうに問いかけた。

「落ち着け。　そこら辺は、発表してから言うぜ。」

「・・・はい。　解りました。」

そんな彼女の言葉を聞いて、気持ちを察しながら落ち着くよう告げた。
彼も考え抜いた結論をこの場で告げる覚悟があり、今集まっている皆よりも重い責任を背負っている。
自分の決めたことに逆らわないと言った彼等の運命を、軽率な考えだけで終わらせるわけにはいかない。
そんな彼の心中を察したのか、もう何も言わないと彼女は決め、口を閉じた。

「じゃ、発表するぜ。」

全員が口を閉じた事を確認すると、ギラムは事前に用意していたデータフォルダを開き、掛かっていた鍵を解除した。
すると中からデータが次々と別画面で沸きだし、必要なデータを彼は中央に持ってきた。
そこには結果発表が書かれたデータと、２人の契約書が入っていた。
リニログーンの分は、事前にコピーを取り用意した契約申請書類と廃棄申請の用紙。
フィルスターの分は、用意したマシナリーを返品確定を示すための解雇書類があった。
どちらにも主人のサインはされておらず、結果の後に書き込める状態となっていた。

そんな主人の様子を見て、手前の席に座るフィルスターとリニログーンは目を閉じた。

『主に選ばれなかったのは、俺の今までの行動が悪かったからだ。　ならそれで、俺は大人しくスクラップされるぜ。』
『ギラムは昨日、ああ言ってくれた。　・・・でも、選ばれなくても悔いは無い。　僕の心を、満たしてくれたから。』

両者はそれぞれ心の中で決意を固め、何を言われても大丈夫なように準備をし、深呼吸した。

「発表するぜ。」

その声を聞いた二体は目を強く瞑り、アリン達は祈るようにその発表を聞く体制になった。
そして、発表された言葉はこうだった。

「俺のパートナーは。　フィルスターとリニログーンに決定し、廃棄にするマシナリーは無しとするぜ。」

いつも通りの声のボリュームで、彼は皆に言い放った。
すると、

「・・・　・・・ええーー！？」

その発表を聞き、一部を除くパーティメンバー全員が驚き声を上げた。
どちらかが破棄されると思っていた矢先の返答だったためか、疑問と不満の声が一時的に部屋を飛び交う。

「あ、主！！　それじゃあ意味無いじゃねぇか！」
「何それ何それ！？　どういう事ー？？？」
「ギラムさん。　その結果はどうして・・・」

「落ち着けって、お前ら。」

そんな発表を言った後の発言に、ギラムは予想していたのか、全員をなだめる様に言った。
その言葉を聞いた一同は再び椅子に座り、とりあえず話を聞く体制へと戻った。

「俺はどちらも破棄にしない、そう言っただけだ。」
「でも主。　パートナーマシナリーは１人１体だろ？　どう考えても無理じゃねぇか。」

結果発表を聞き延命出来たのだが、どうにも納得が行かない様子でフィルスターは座った状態で問いかけた。

「フィルはこのまま俺のマシナリーとして行動する。　リニロは別の契約者の名義を借りて、俺の所で仕事が出来るようにセットしたんだ。」
「ええっ　マジ！？　コイツも同居するのか！？」

問いかけに対し彼はそう言うと、気に入らない点があったのか、フィルスターは席を立ちギラムの元へ行きつつ叫んだ。
その言葉を聞いたギラムはデータの１つを移動させ、彼にその準備が整っているログが出来ているのを見せた。

「マジ。」
「げぇ・・・　・・・マジか・・・」

目の当たりにした事実と返答を聞かされ、フィルスターはうなだれるように床に膝を付いた。
ある意味、敗北しているとも言えそうな光景である。

「あ、主・・・　ギラム・・・？？」

フィルスターの発言が終わった事を確認し、リニログーンはギラムの名前を呼ぼうとして迷った。
際ほどまでは主と言っていたが、少々気に掛かる点があったためか、どちらで呼べばいいのかわからない様子。
その言葉を聞いたギラムは苦笑し、彼に言った。

「主でいいよ。　リニロ。」
「・・・主。　俺は誰の名義を借りるんだ？」

許可を貰った呼び方をしながら、リニログーンは気になっていた事をギラムに問いかけた。
自分の主人としてギラムがいるのではなく、彼はフィルスターの主人であり、その補佐として自分が許可されただけ。
そのため、根本的に誰のパートナーになるのか、そこが気になるようだ。

「俺の知り合いに、新しいパートナーマシナリーを探してる奴がいてな。　そいつに事情を説明して、サインしてもらえるように頼んだんだ。　そしたら、ＯＫももらえてすでにサイン済みだ。」

問いかけに対する返答をした後、ギラムはデータの一部を移動させ、彼に見える様展開した。
そこには所有者である名義に相手のサインがされており、リニログーンのナンバーと名前が書かれていた。

次の臨時の所持者としての欄には、ギラムの名前も入っていた。

「・・・主。　じゃあ・・・」
「ああ、お前はもうココの住人だ。　これを提出すれば、遠慮なくココで生活できるし、正式な社員の１人としてカードも手に入る。　俺の部屋にも、何時でも来れるぜ。」
「・・・！！　ありがとう！！」

書類に目を通した後、リニログーンは嬉しそうにギラムに飛びついた。

「なっ！！」

「今日からお前も、俺らの所属するパーティメンバーの一員だぜ。　リニロ。」
「うん！　信じてくれてありがとう、ギラム！！」

ギラムが言った言葉に対して嬉しかったのか、リニログーンは涙を流しつつお礼の言葉を言った。
その光景を目にし、項垂れていたフィルスターは即座に起き上がった。
そして再び抗議する。

「コラ！　正式な主のパートナーは俺なんだからな！？　勝手に独占すんなっ！！」

その行動を目にし嫉妬したのか、フィルスターは彼を引き剥がそうとするべくギラムの身体を昇りだした。
器用に腕と翼で上昇し、リニログーンの事を足蹴にする。

「もう俺の主でもあるんだからな。　その注意は聞かないぜ、フィル！」
「うるさぁああーーーいい！！　俺は認めないんだからな！！」

反発するも、リニログーンは笑顔で答えつつフィルスターに言った。
すると案の定フィルスターは叫びだし、リニログーンとギラムの間に割り込んだ。

「フィル、俺は言ったはずだぜ。　結果発表後の事は、全部受け止めるってな。」
「・・・クッ！」

そんな割り込みに対して２体を同時に抱いているギラムは、問答無用とばかりにフィルスターに

そう告げた。
先程の再確認には、こんな時のためにと用意された作戦の様だった。

「図ったなぁあ主！！」
「何の事かな。　な、リニロ。」
「うん！　主！」

「主って言うなぁあああ！！」

仲良さそうに言う２人の言葉を聞き、フィルスターはこの数日に納得のいかないフレーズを、ここぞとばかりに叫んだ。
マイルームの外に聞こえるどころか、軽く部屋の扉が振動するくらいの卑屈の叫びだった。

「良かった。　２人共破棄されなくて。」
「本当。　良かった・・・」

そんな３人のやり取りを遠目から見ているウィンドベルとアリンは、安心した様子でそう言った。
喧嘩はしていても仲の良いやり取りをする３人は、彼女からみてもとても微笑ましい光景の様だ。
上下関係のあるマシナリーの彼らを、心から出迎える彼の優しさ。
それこそが、本当に信頼する関係となるのかもしれないと、彼女は思うのだった。

「いいなー　アタシもパートナー２人欲しいなー」

同様にメアンも安心してはいるが、少しだけ羨ましそうに呟いた。
すでに相性の良い相方はいるものの、『２体のパートナーマシナリー』と言う点が、個人的に良いようだ。

「マスター　ユーを指導できるのはミーだけだぜ？」

「エへへ。　そうだね、ベリリー」

だが現実もあり決まりごとでもあるためか、ラスベリーが言ったことにメアンは素直に返事をした。
ワガママを互いにしあい、それでいて大切な場面での結託が図れる相手。
その点を見ても、３人は申し分ないのかもしれない。

その後フィルスターはしばらく叫んではいるものの、リニログーンは無視してギラムに抱きついていた。
ギラムはそんな自分思いの２体のパートナーマシナリーを見て、優しい笑顔を見せつつ、２人のやり取りを見ているのだった。

－ＥＰＩＳＯＤＥ　ＥＮＤ－